

## 「ねたみの目」(サムエル記上一八・六〜三〇)

### 1 始まり

一人の羊飼い、少年ダビデが、石ころ一つをもってペリシテの大男ゴリアトを倒した、それによってイスラエルに大勝利がもたらされた、先週私どもが聖書から聞いたところです。

ただそこで改めて知ることになったのは、このゴリアト対ダビデ、一騎打ちを、ダビデ自身が、まさしく神の戦いだと見ていた、生ける神が生ける神として世界に証しされる、そういう戦いであると見ていたことです。そしてそれは聖書の見方、聖書の歴史の捉え方でもあったのです。

今日の箇所には、ペリシテ軍を破ったあとのイスラエルの様子が、サウルとダビデの関係を中心に語られています。

すでに何回か申し上げていますが、(上下に分かれている)サムエル記は、大きく見れば、上一六章から下四章まで、ダビデが台頭し、サウルが没落する歴史を描いています。今日の一八章はその始まりとなるところです。

ダビデが台頭しサウルが没落するといっても、ダビデが権力をねらって、現に王であるサウルに戦いを挑むというようなことでは、もちろんありません。むしろ反対です。ダビデを警戒し、なきものにしようとするサウルに、ダビデはいつも応戦を余儀なくされるのです。ダビデはサウルを滅ぼしてしまおうなどとはしない。受けとめようとしています。サウルが主なる神に立てられた、油注がれた王であることに変わりはないのです。

しかし現実にはダビデは盛んになり、サウルは没落していきます。「主はダビデと共におられ」(一二節、他)、サウルを離れたからです。現在の王サウルと将来の王ダビデ、この二人の軋轢、闘いが始まります。サウル王の心の中で始まります。それを今日の一八章は伝えていきます。

ダビデはゴリアトを倒し、サウルに特別に取り立てられます。サウルの子ヨナタンなど、王家の人からも愛されます(一、二〇節)。兵士や家臣たちに支持されたことはいまでもありません。

さて度々の戦いでサウル王が凱旋して帰ると、そしてその中に家来の一人として(五節)ダビデもいたわけですが、町々から女たちが出てきて、太鼓を打ち、喜びの声をあげ、琴を奏で、歌い踊りながら迎えたというのです。

女たちは樂を奏し、歌い交わした。「サウルは千を討ち、ダビデは万を討った」。サウルはこれを聞いて激怒し、悔しがって言った。「ダビデには万、わたしには千。あとは、王位を与えるだけか」。この日以来、サウルはダビデをねたみの目で見るようになった(七〜九節)。

「ねたみの目で見るようになった」とあります。これが軋轢の始まりです。それはサウルの心において始まったのです。

ねたみ、嫉妬というのは、一般に、それまで抱いていた優越感、愛情、あるいは独占感（自分だけのもの）といったものが、突然におびやかされる、人に凌がれる、奪われる、それに気づいたときに生じる一種の悔しさの感情です。それは人の心の中に深く巣くって、消すことのもっとも難しい感情の一つです。ねたみは、容易に憎しみに変わり、憎しみは人を殺すことにまで昂じていきます。

## 2 殺そうとした

ところで、ねたみ、という言葉は、聖書では、大事なところで、多くはありませんが、現れる言葉の一つです。

旧約聖書では、ねたむ神（出エジ二〇・五他、口語訳）という言い方がよく知られています。ねたむほどに愛する神（ヤコブ四・五）です。ひとりの神に帰依している者が他の神にも色目を使う、自分以外のものに少しでも心を向けるなら、これをねたみ、その忠実でない者を裁く、許さない、それほどの熱情をもって愛する神ということです。

新約聖書では、神を知らない、神を恐れない人間の心情の一つとしてねたみが上げられています（ローマー・二九）。またねたみは、私どもが暗やみを歩いていることの証拠でもあります（一二・二三）。それは人の罪の一つの姿であり（テトス三・二三）、ガラテヤ書では御霊に従っていない、人間的な生き方をしている、その一つと見られています（五・二六）。

今日の箇所では、サウルのねたみは、主なる神が彼を離れ、むしろ神からの悪霊が彼を襲ったことと無関係ではありません。「ものに取りつかれた」（一〇節）ようになって、ねたみにとらわれたサウルは、正気を失い、そこから抜け出すどころか、何が何でもダビデを殺そうとしたのです。

それがくり返されたことが今日の箇所から知られます。最初はダビデが王のために竖琴を奏でていたときです（一六・一四以下）。サウルはキレたような状態になってダビデを殺そうとします。

サウルは、槍を手にしていたが、ダビデを壁に突き刺そうとして、その槍を振りかざした。ダビデは二度とも、身をかわした（一〇〜一一節）。

ダビデは「二度とも、身をかわした」とあります。先ほど私は、サウルに対するダビデの態度を、サウルを受けとめようとするものだったと申しました。それがここで早速見られるように思います。槍で突かれ、二度目もあるのは当然予想されます。それなのにダビデは逃げなかった。身をかわして難は逃れたけれど、抵抗することも反撃もなかった。受けとめたのです。この後にも見られるこのダビデの言動に私は、サウルに対する主なる神の態度、接し方を重ねて見る思いがします。

二度目にダビデを殺そうとしたのは、別の手段によるものでした。直接手をくみださず戦場に追いやって殺そうと画策したのです。

サウルはダビデを恐れ、ダビデを遠ざけ、千人隊長の長に任命した。ダビデは兵士の戦闘に立って出陣し、また帰還した。主は彼と共におられ、彼はどの戦いにおいても勝利を収めた(一二〜一四節)。

ダビデは戦いにことごとく勝利し、サウルのもくろみは失敗します。しかしサウルはこのペリシテ人の手で殺すという手段を、聖書によれば、さらに追求します(下一・一五を見よ)。自分の娘、長女メラブと、次女ミカルを使って、彼女たちを嫁がせて、その花婿を殺そうとします。政略結婚というのは、どこにでもあります。それによって娘婿を殺害するというのは、あまりない。

サウルはダビデに長女メラブを妻として与えようとしています。そしてこう付け加えることを忘れません。「わたしの戦士となり、主の戦いをたたかってくれ」。ダビデが戦場で死ねば、娘は寡婦になります。しかしそれよりもダビデをなきものにするのが優先です。悪霊が、狂気が彼を支配しています。その際のダビデの返答に注意しておきたいと思います。

ダビデはサウルに言った。「わたしなど何者でしょう。わたしの一族、わたしの父の一族などイスラエルで何者でしょう。わたしが王の婿になるとは」(一八節)。

ダビデは丁寧に返事をしています。断ってはいけません。これも私は、ダビデがサウルを受けとめようとしたものと理解したいと思います。しかし長女メラブの場合は、理由は分かりませんが、いざ嫁ぐ段になって、サウルは娘をダビデではなくアドリエルに嫁がせてしまいます。

ダビデを殺そうとしたのは、この箇所でもう何度目でしょうか。またまたサウルは二番目の娘ミカルを使って、なきものにしようとしています。こうなるとサウルの執念というより、自らの執念に翻弄される、立ち止まれなくなった一人のあわれな権力者かと思えます。

ミカルがダビデを愛していた、父サウルはこれを利用して、ここには「罨」(二二節)という言葉が見えますが、同じくペリシテ人との戦いに出して、これをなきものにするとしたのです。サウルの使いとして来た家臣から王の意向を聞いたダビデはこう答えています。

ダビデは言った。「王の婿になることが、あなたたちの目には容易なことと見えるのですか。わたしは貧しく、身分も低いものです」(二三節)。

「貧しく、身分も低い」。つまりふさわしい結納金はおさめられない。この返事を聞いたサウルは、結納金の代わりに、ペリシテ人の包皮百枚、つまり百人の命を要求します。この戦いでダビデをなきものにできると王は考えたのです。しかし、それを聞いたダビデは、こうして王の婿になるのを良いことだと思い、出撃し、二百人のペリシテ人の包皮を持ち帰り、ミカルを妻とし、王の婿、王権にもっとも近いところに

来てしまいます。サウルの企てはことごとく失敗に終わります。皮肉なことにすべて正反対の結果となり、ダビデを利することになるのです。ダビデは王位にいつそう近づくことになります。

### 3 選びと棄却

サムエル記の、私どもが必ず参考にする註解書を書いたヘルツベルク (ATD) という人は、「サウルの生涯の悲劇性は明白である」と書いています。

「悲劇」の定義を知っているわけではありませんが、サウルがことごとくうまくいかない根本の理由、主がダビデと共にいてサウルを離れたということ、聖書的な用語ではないけれど、いわば運命を知らないのなら、知らないときに、物語は悲劇となります。

しかしサウルは主がダビデと共にいることを知っているのです(二八節)。自ら罪を犯したがゆえに王位から退けられることになったことを、サムエルによって知らされているのです(一五・二六)。そうであれば悲劇的ではあっても悲劇とはいえないように思います。

悲劇ではないといってもサウルが同情に値することは明らかです。神ご自身の憐れみがダビデの態度と言葉によって示されていると私には思われます。サウルの企てはことごとく裏目に出ます。そしてそうなることをダビデはわかまえています。そしてサウルを受けとめているのです。

ダビデの生涯をたどって私どもはサムエル記の学びを始めました。まったく意外なことにサウル、この主に選ばれたサウル、しかし主に捨てられたサウル、この人にさし当たり、私どもの目は釘付けになります。

先週の祈禱会の昼の部でも少し話題になったことです(祈禱会では、その週の説教をもう一度受けとめ直して祈ることをしています)。サウルは少しかわいそう、いややっぱり罪を犯した、立ち帰りの機会があったのに、悔い改めなかった、立ち止まることをしなかった、等々。すべてその通りだと思えます。今日の箇所を見ても、それは明らかです。

しかしその上で私はサウルに重ねて、あるいはサウルを通して、イエス・キリストへと目を注いでいただきたいと思うのです。われらの主イエス・キリストもまた神に選ばれ、捨てられたのです(マルコ一五・三四)。神の子イエス・キリストは人の子として私どもの罪をになって十字架への道を歩まれた。十字架は十字架で終わりました。イエスは神によって甦らされた。それによって神から引き離されたイエスは神に受け入れられたことが明らかにされたのです。サウルはかわいそう、なのではなくて、主イエス・キリストによって、彼もまた救われるのです。私どもの救いはイエス・キリストの生と死と復活によって開かれた。そしていまも私どもの前に信仰によって受けとめるようにと差し出されています。